

# 暮らしの中の戦争

なりわい  
— 日々々の生業と食事 —



うちは八日市で八百屋をしていました。  
前はいろいろ売っていましたが、  
店先には配給の物だけがポツンとあるだけ。  
父が、家で食べる野菜をつくっていました。

筥売りに集まる人々（戦時中、現在の近江八幡市北里地区、晝田和子さん 提供）

令和6年(2024年)

1月5日 **金** - 6月23日 **日** **〈入館無料〉**

開館時間 / 午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)

休館日 / 月・火曜日(祝日にあたる場合は開館)

※その他業務の都合により休館する場合があります。

駐車場 / 約50台(無料)

詳しくはホームページをご覧ください。

滋賀県平和祈念館

検索



# 暮らしの中の戦争

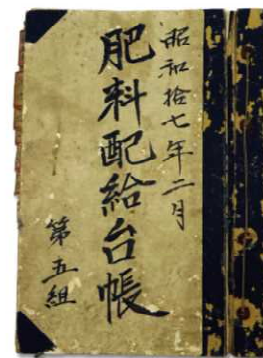
## なりわい 一日々の生業と食事

昭和6年(1931年)の満洲事変以降、日本は中国と戦争状態となり、太平洋にまで戦線が拡大していきました。日本政府は戦争を遂行するために、暮らし中にある資源や物資等を統制しました。戦時中の人々は、どのように暮らしを立て、食べていったのでしょうか。

戦時中のお店には、当日配給される品物しか並ばなくなり、閉店するお店が増えました。農家では、収穫したお米を供出しなければなりません。働き手を戦地へ送った家では、昼夜問わず農作業をしましたが、家族が食べるための食糧を確保するのがやっとのことでした。

配給品となった生活用品や食糧は、十分な量が行き届かなくなり、人々は日々の食糧を求めて、物々交換やヤミ市へ行きました。敗戦後は、引揚者の増加などにもない、食糧不足がさらに深刻となりました。

滋賀県平和祈念館では、体験談と資料をもとに戦争によって資源・物資が統制され、日々の暮らしが変わりゆくようすを紹介します。



「肥料配給台帳」昭和17年2月  
(日野町大字野出第五組 提供)

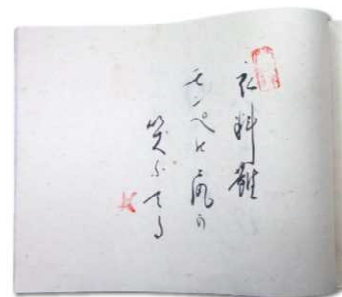


大阪から滋賀へ疎開してきた児童の昼ごはん  
(炊事日誌をもとに再現)



家庭用米穀配給通帳 昭和20年 (個人 提供)

衣料難  
モンペの尻が  
笑ふてる



「松尾青進会親睦冠句集」より (個人 提供)

### 関連行事

予約不要 学芸員による企画展示説明会 令和6年1月14日(日) 13:30～(45分程度)

### 平和祈念館からのお願い

#### ■ 体験談の聞き取り調査・資料寄贈にご協力ください

滋賀県平和祈念館では、国内外で戦争を体験された方からの体験談を募集しております。調査員がうかがってお話をお聞きます。また、戦争に関わる資料(戦没された方の遺品、戦時中に使っておられた品物、当時の写真・書類など)を寄贈していただける方を探しています。対象は現在、滋賀県にお住まいの方、または滋賀県に關係して戦争・戦時中の生活を体験した方です。

#### ■ ボランティアの募集

滋賀県平和祈念館では、戦争の悲惨さや平和の尊さを伝える活動のボランティアを募集しています。

詳しくは「滋賀県平和祈念館」までお問い合わせください

TEL / 0749-46-0300 FAX / 0749-46-0350

E-mail / heiwa@pref.shiga.lg.jp

